令和５年

第７回定例会議事録

令和５年７月２６日

泉大津市教育委員会

令和５年７月２６日（水）午前１０時より令和５年第７回泉大津市教育委員会会議定例会を泉大津市教育支援センター１階大研修室に招集した。

出席委員

教 育 長	竹内　悟
教育長職務代理者	澤田　久子
教育委員	西尾　剛
教育委員	池島　明子
教育委員	奥　健一郎

出席事務局職員

教育部長	丸山　理佳
教育部次長兼教育政策統括監	鍋谷　芳比古
教育部教育政策課長	大塚　和弘
教育部指導課長	藤谷　考志
教育部指導課長補佐	家原　慎太朗
教育部指導課長補佐	松葉　康孝
教育部指導課長補佐	森田　有加里
教育部教育政策課	三上　達朗
教育部教育政策課	友永　彩絵

案件

日程第　１　議案第２９号　令和６年度使用小学校教科用図書の採択について

議事録署名委員

教育委員　西尾　剛

会議の顛末

○竹内教育長　令和５年第７回教育委員会会議定例会の開会宣言
○令和５年第６回教育委員会会議定例会議事録の承認

△日程第　１　議案第２９号　令和６年度使用小学校教科用図書の採択について

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）泉大津市立義務教育諸学校教科用図書選定委員長の鍋谷です。どうぞよろしくお願いします。令和６年度使用小学校教科用図書採択に係る今までの取組みについて説明します。教科用図書採択については、平成 13 年に制定された「泉大津市義務教育諸学校教科用図書選定委員会規則」に基づき、本年４月より令和６年度使用小学校教科用図書の採択事務に取りかかりました。５月９日に、二市一町教科用図書選定資料作成委員会全体会を開催し、選定に係る調査報告書の作成に取りかかり、約１ヶ月半の調査を経て報告書をまとめていただきました。なお、選定資料作成委員会は本市と高石市、忠岡町の二市一町で設置しており、今回の選定資料作成委員に二市一町の小学校教頭を任命し、調査員には同じく二市一町の小学校教員を任命しました。また、６月５日に小学校長１名、保護者代表１名、教育委員会事務局２名からなる第１回選定委員会を開催いたしました。続いて、７月４日には、二市一町教科用図書選定資料報告会が開催され、令和６年度使用小学校教科用図書に係る調査報告を受けました。その報告をもとに第２回選定委員会で検討を行い、報告をまとめ、各委員の皆様に報告させていただいたところです。本日はそれをもとに、いずれの教科用図書を採択するか、ご審議いただくものです。どうぞよろしくお願いします。

◆教育長（竹内悟）只今、選定委員長の鍋谷教育政策統括監より説明を受けました。一方、私たちもそれぞれ、この１ヶ月半、教科書センターである教育支援センターに通って各教科書を閲覧し、さらに２度にわたって事前に教科書の内容等についての意見交換会を重ねてまいりました。本委員会では、調査員の先生方が普段の業務もお忙しい中、またタイトな日程であるにもかかわらず、熱意をもって調査研究をされた結果を尊重しつつ、選定委員会からの報告を参考にして審議を進めていきたいと考えます。

　それでは、早速ですが、「国語」の審議に入ります。私自身も質問や意見を述べさせていただきますので、ご了承ください。選定資料報告書は、すでにお配りしておりますので、十分ご検討いただいたと思います。それでは、国語の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（池島明子）国語の教科書選定をするにあたって、特に大切にされた視点等をご説明ください。

◎指導課長（藤谷考志）泉大津市立義務教育諸学校教科用図書選定副委員長の藤谷です。どうぞよろしくお願いします。

　令和２年度に改訂された学習指導要領では、全教科において「主体的・対話的で深い学び」を通して、知識や技能のインプットに偏ることなく、思考力・判断力・表現力もバランスよく育成することが求められています。特に国語は、言語力育成の要を担う教科として、教材を通して「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」の能力を育成する内容となっているか、どのような言語活動が盛り込まれているかという視点が大切であると考えます。また、子どもたちにとって国語は各単元の関連性を実感しにくく、学習をつなぎ、積み上げていくためには、学年を越えた系統性も重要な視点ではないかと考えます。

◆教育委員（池島明子）ではそのような視点で見たときに、各教科書の特徴をご説明いただけますか。

◎指導課長（藤谷考志）どの教科書も、めあてと学習活動が例示されており、充実した言語活動の実現を促しているところに、各社の工夫が見られます。

東京書籍では、SDGs をはじめ、環境・キャリア・食育・防災など、現代的な課題に関連した教材が取り上げられ、未来に向けた課題解決を通した学習となるように言語活動が設定され、学習の流れも細かく丁寧に示されています。

教育出版では、日常生活や学校生活に関連した題材が設定されていて、学習が実生活に結びつき、目的意識や必然性が高まるように工夫されています。

光村図書では、各単元の目標をもとに、子どもたち自身から問いを引き出し、一人ひとりの興味に沿って学び、進められるよう、課題を選択できるなど、比較的自由度の高い学習計画が想定されているという特徴が見られます。

◆教育委員(池島明子)もう１つの視点である学習の積み重ねという部分について、特徴的な教科書があれば説明をお願いします。

◎指導課長（藤谷考志）光村図書と東京書籍が特徴的と考えております。

光村図書は、巻頭の「国語の学びを見わたそう」において、前の学年で学んだことと今の学年で学ぶことが示されています。そして、問いをもつ、個人で考える、他者と考える、振り返るという、学び方を示すことで、学習に見通しをもつことができる工夫となっています。

東京書籍は、巻頭の「言葉の力を集めよう」や、巻末の「言葉の力のつながり」において、見通しをもったり、前の学年とのつながりを実感できたりする工夫があります。また、物語や説明文の学習も、低学年から高学年へとつながりをもって積み上げていく配列の工夫があります。

◆教育委員（澤田久子）系統性については、特に一年生の初めのスタート時に、国語は全教科に絡むところがあって、これから勉強を始めるという感じがあると思いますが、特に私がいいなと思ったのは、東書の声の大きさを表すページです。声のものさしと書いてあって、動物と比較していて、声の出し方が視覚的に見てすごくわかりやすいと思いました。これは６年間通じて必要なことだと思うので、１年生のところでこういった学習をするところがいいと思いました。特に１年生がつまずきやすいところとして助詞の「て・に・を・は」と言われるものです。教師は「くっつきの『を』」とか「くっつきの『は』」とか、「くっつき」という言葉をよく使います。そういう意味では、同じ東書の 36 ページとか、光村も１年生の 42 ページあたりにあったと思いますが、「くっついている」というのがよくわかると思いました。視覚的に見てわかるようにしているのは、とってもいいなと感じています。

◆教育委員（奥健一郎）１年生のスタートの段階でご意見がありましたが、それに関して補足的に申し上げると、初めて学校での経験と接する扉として、各社の工夫を感じました。初めて学校に行く、そして国語に触れる、その時の第一段階は非常に重要だと思いますが、その段階で１年生の児童に、このページでどんな話をするのかということを各学校の先生方に期待したいと思います。私は、特に光村が１年生の導入部分では素晴らしいなと思いました。

◆教育委員（西尾剛）最近は１人１台タブレットで、タブレットの活用が非常に重視されていると思います。それとの関係で特徴がある教科書はどれかという点が１点。もう１点は、最近の子どもの読書は離れがずっと前から言われていると思うのですが、その点に関しても何か工夫をしている教科書はどれでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）各社ともＱＲコードから読み取るコンテンツがあり、視覚・聴覚で捉えることで、子どもたちの学びを支援し、広げ、深める工夫があります。

特に教育出版の「学びリンク」は、写真・動画・資料・ワークシート・リンクと大変豊富な内容です。

光村図書は、学習の最初に問いをもつための動画や、作者・筆者の思いやメッセージの動画があり、学習を深める意図が感じられます。

また、各社とも図書館の活用や関連した本の紹介については非常に充実していて、教材をもとに読書が広がるような工夫がありました。

◆教育委員（池島明子）国語において、書いてある内容を正確に読み取るということはもちろんすごく大事だと思うのですが、そこから何を感じるとか想像するとか、考えるということが大事だと思っているのですが、その点についてはいかがでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）光村図書では、物語文や説明文の学習において、まず個人の考えをもつことが重視されていて、これは個別最適な学びと協働的な学びの往還が意識されたものと考えられます。

◆教育委員（澤田久子）私も物語の読解について比べてみました。３社とも昔からよく使われている『スイミー』や『ごんぎつね』『モチモチの木』『大造じいさんとガン』などは入れられていて、その中の読解については、特に光村が言葉に着目して心情につなげるような読解になっていると思いました。例えば、ごんぎつねだったら、「空はからっと」というところから、心情を読み取るというような言葉が入っているとか、言葉から心情を読み取るというのがすごく丁寧にされていると思いました。光村の『モチモチの木』は、自分の意見をもった上で、友だちの意見を聞いて、考えて深めていくような工夫がされていると思いました。

◆教育長（竹内悟）ご意見ありがとうございます。では、時間もございますので、ここで､国語の採択をいたします｡今の質疑と選定委員会の報告書をふまえると、各社工夫がされている中で、光村図書の教科書がいいように思うのですが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校国語の教科用図書は光村図書の「国語」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）次に「書写」の審議に移ります。書写の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（奥健一郎）根本的な質問ですが、書写の指導において大切な観点はどういうことがあるかご説明いただけますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）書写の指導は、毛筆を使用するというのが何よりもの特徴になります｡そこで､毛筆と硬筆を関連付けながら指導し、どちらも文字を正しく整えて書くことができるように取り扱われているかが大切な観点であると考えます。また、文字を書くことは、生活において頻繁にあるので、実生活で活かせる場面を意識した学習であることは、児童が関心をもって取り組むことにおいて重要であると考えます。

◆教育委員（奥健一郎）その観点から各教科書を見ると、それぞれどのような特徴になるか教えていただけますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）東京書籍は「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」「振り返ろう」というプロセスで、硬筆文字から課題を見つけ、毛筆で書きそれを生かして硬筆で他の文字を書く工夫がされています。

教育出版は硬筆や毛筆のためし書きの過程で自ら課題を見つけ、よりよくするという学習の進め方が示されているところが特徴的です。

光村図書は「考えよう」「確かめよう」「生かそう」といった学習の進め方が

示され、見通しをもって児童が主体的に取り組むことを促しています。

◆教育委員（奥健一郎）実生活ということですが、実生活とのつながりという観点で工夫がある教科書はありますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監(鍋谷芳比古)教育出版と光村図書が特徴的でした。

教育出版は、身につけた書写の力を、学習活動のどの場面で生かせるのかがわかりやすく示され、手紙や掲示板など、受け取る相手を意識した、手書きの良さに触れる内容を扱っています。

光村図書は、国語の教科書と連動した教材が扱われ、他教科を意識した、横書きの書き方が充実し、連絡帳の書き方が扱われているなど、学びを日常に広げる工夫がありました。

◆教育委員（池島明子）光村の教科書が国語の教科書と連動しているとのことですが、それがどう良いことなのか、もう少し詳しく教えていただいてよろしいでしょうか。

◆教育委員（澤田久子）特に１年生の書写っていうのは、国語の時間の文字指導と連動しているので、国語の時間に使いやすいかどうかということがあると思います。３年生からは初めて毛筆が入ってきますので、書く文具はいろいろあると思いますが、日本古来の毛筆を習う初めての体験なので、教科書はすごく大事になってくると思います。

◆教育委員（西尾剛）確かに毛筆は難しいと思うのですが、１・２年生の硬筆についても、単純に考えれば鉛筆でその通り写せばいいわけだから、なぜ上手に書けないのかなと自分でも思うのですが、大人でも難しいのだから子どもにとっても難しい。形を整えて書くためには、どのような指導が、重要・有効なのでしょうか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）書写の学習が始まる１年生と、毛筆学習が始まる３年生のスタートは、姿勢や鉛筆・筆の持ち方、道具の置き方や使い方などを丁寧に指導することも重要です。また、「とめ・はね・はらい」などの筆づかいを身につけるためには、視覚的にとらえる工夫も有効であると考えます。

◆教育委員（澤田久子）やっぱり「とめ」とか「はらい」とかをきちっと指導してもらっていると、子どもたちはしっかり意識するので、すごく大切なことだと思います。「とめ」「はらい」はどの教科書にも書いてあって、わかるようになっていると思うのですが、光村はキャラクターが割とシンプルでわかりやすいと思いました。特に私がいいなと思ったのは、３年生で毛筆が始まって、道具を出したり片付けたりするのは大変なことなんです。３年生の初めの時は、それだけで時間を取ってきちっとやらなきゃいけないです。姿勢とか道具については、どの社も割と丁寧にはされているのですが、特に光村は片付けの仕方まできちっと書いてあってとても丁寧だなと思いました。片付けがいい加減になってしまうことがあるので、「こんなふうにしたらいいよ」と教えてくれているのはとってもいいなと思いました。

◆教育委員（奥健一郎）多様性の配慮ですが、例えば、どの教科書にも言えると思いますが、右利き左利きのどちらも写真を掲載している。これは非常に配慮がすばらしいなと思いました。特に東書の場合は書き込む欄に工夫がされていて、本当にすごく素晴らしいと思っております。

◆教育長（竹内悟）特に低学年ですが、硬筆の練習枠のところ、全てが１回しか書けないです。小学校の担任の先生は印刷したりして、工夫してくれています。なので、教科書で全社がそういう工夫があったらいいなというのは感じます。あと、私は色覚に特性がありまして、それぞれの教科書会社が配慮されていて見やすい

色にはされているのですが、個人的には光村が一番見やすいかなという感じがしております。

◆教育委員（西尾剛）身も蓋もないような話になるのですが、私も今まで生きてきた経験で、学校を卒業してから毛筆を使ったことがないです。唯一使うのは、結婚式に行った時の出席の芳名帳とのし袋。しかし、それも筆ペンで書くから筆ではないし、実際は下手で書けないので誰か上手な人に頼んで書いてもらいます。ですから毛筆というのは、はっきり言って実用性がない。だから実用性があるのは硬筆の方だと思います。ただ硬筆も最近はワープロで打つので書く機会もなくなってきていますが、まだ硬筆であれば人前で書く機会があるし、そういう時に整った字が書ければかっこいいし、下手だとどうしても気後れして恥ずかしくなってしまう。毛筆は日本の文字の成り立ちとか、文化歴史を知るという意味では非常に大事なんですけれども、それだけでは発展性、必要性がないので、毛筆の勉強を通じて硬筆に生かせるような、「こういうふうに書くのか」とか「はね」「とめ」とか、そういった視点で教科書が作られていればいいのではと、感想ですが思います。

◆教育委員（奥健一郎）実用性という観点では、毛筆というのは基本中の基本でして、姿勢から持ち方から、毛筆で基本を身に付けて硬筆を行うと非常にやりやすいということで、基本を身に付ける上では非常にいいと私は思います。ただ、おっしゃる通り、じゃあどういうふうに硬筆に活かしていくかという工夫ですよね。それに関しては現場の先生方に期待しております。

◆教育長（竹内悟）僕の感想ですが、奥委員も海外によく行っておられるのでわかると思うのですが、海外に行くと、書道という日本の文化がものすごい武器になるんです。だから毛筆がちゃんとできるということは、学校の中で必要な学びだとすごく感じます。日本にずっといるとあまり感じないかもしれませんが、海外に行くとものすごくそれは感じます。

◆教育委員（奥健一郎）それをどう生かすかということですよね。

◆教育長（竹内悟）はい、そうなんです。今までの質疑ご意見並びに選定委員の報告書を踏まえて、決定していきたいと思います。話の内容では光村図書がいいように思いますが皆さんいかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校書写の教科用図書は光村図書の「書写」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「社会」に移ります。社会の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

　社会については、暗記する教科という印象から少しずつ脱却してきていると感じるのですが、社会に対する勉強の取組み方について、どのような点が大切なのでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）社会を学習する上で大切なことは、子どもたちがいかに自分の生活と結びつけて内容を捉えることができるかという点だと考えます。社会の仕組みの良さとともに課題にも気づき、自分の考えをもつための目標や成果物の設定が重要になってくるのではないでしょうか。

◆教育長（竹内悟）ではその視点で、各教科書を見た時のそれぞれの特徴をお願いします。

◎指導課長（藤谷考志）東京書籍は問題解決的な視点を重視し、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」というステップで進められるよう工夫がされています。またＱＲコードから読み取ることのできる豊富な資料やワークシート、思考

ツールなどが特徴的です。

教育出版は社会的な「見方・考え方」の働かせ方につながるヒントを登場するキャラクターのセリフで示している工夫があります。また、「まとめる」「つなげる」のページでは対話的な学習や表現活動の具体的な方法が丁寧に示されているのが特徴的です。

日本文教出版は素朴な疑問から児童が学習問題を発見することを促すために、登場するキャラクターの会話が掲載されています。また、単元の終わりには、さらに考えたい問題を掘り下げ、一人ひとりが調べ考えたことを話し合う協働的な学びが意識されていることが特徴的でした。

◆教育長（竹内悟）３社の教科書を見ていると、各教科書会社から教師の力量、教師のファシリテーション能力が求められているような気がして、先生方も大変だなと思っています。要するに、過去の授業であれば、先生が課題を提示して、「はい、子どもたち考えなさい」というような状況でしたが、現在は子どもたちからの発言、考え、思いを引き出すためにどうすればいいのかということが求められているので、特に社会については非常に先生の力量が求められているなということをどの教科書においても感じ、それぞれのコメントの部分まで読んでいくと、それをどう扱うのかなというところに非常に興味が湧きました。

◆教育委員（奥健一郎）子どもたちから発言を引き出す力というファシリテートのお話がありましたが、さらに子どもたちの発言をつないで広げていきたいですよね。この広げていき方というのがファシリテートの力、能力ですので、もっとつなげて広めていくというところまで求められているという気がしました。

◆教育長（竹内悟）令和の日本型学校教育で求められている学びが大きく２つあって、「個別最適」と「協働」の学びです。この協働の学びの部分が、言葉は悪いかもしれませんが先生方にとって取組みやすい。でも、それがグループ学習に偏ってしまっているので、こういう問いかけの部分が、僕はすごくいいなと思っています。

◆教育委員（西尾剛）先ほど、社会というのは昔は暗記する科目で面白くないということで、そこから脱却しないといけないと言われているのですが、しかし、基本的基礎的な概念をしっかり覚えるということも大事で、そういう基本的な概念を覚えているからこそ思考を発展させていくことができる。最近は暗記するということが非常に軽視されているような気がしますが、教科書を見ただけで、何が大事か、最低限これは知っておかないといけないということがわかるような書き方をされているのが望ましいんじゃないかなと思います。

◆教育委員（池島明子）自分の子どもを育てる時にも思ったのですが、興味も何もなくて、目的もわからなくて、年号とかだけを覚えていく、それを繰り返しているだけということではなくて、少しでも何か学ぶ意義や目的を実感して覚えていくということがあると、記憶だけじゃなくて心に刻まれる、自分の体に入っていくというのがすごく大事なんじゃないかなとすごく思いました。感想めいておりますが、それが大事かなと考えております。

◆教育委員（澤田久子）視点は変わりますが、社会科は人権に対する配慮が必要かと思うのですけれども、そういうところで各教科書の特徴的があれば教えていただけたらと思います。

◎指導課長（藤谷考志）人権の取り扱いにつきましては、どこの教科書にも配慮が見られます。

東京書籍では、人権・福祉に関わる社会の働きや人々の取組みを取り扱うなど、人権尊重についての認識を深める内容になっています。

教育出版では、世界の国や地域の交流について学習し、世界が抱えている課題

の解決について考えるなど、世界の共生について学び考えていく工夫があります。
　日本文教出版では、地域における多文化共生について学習し、日本とつながりの深い国々について学習するなど、世界の人々との共生について考えることができる工夫があります。

◆教育委員（奥健一郎）社会科の教科書の人権ということで、非常にこれはナーバスな問題になってくるのですが、特に戦争を中心とした歴史の記述については、非常に慎重になるべきかと思います。特にウクライナ侵攻という現在進行形の戦争状況があって、子どもたちもニュースでそれを見ることがあると思いますし、子どもたちにとっても他人事ではないと思うんですね。そういうことから考えたときに戦争をどう振り返るかということは大切だと思いますし、各教科書に工夫はされていると思うんですけれども、歴史を語る上で他国の立場や態度について論じるというのは先生も含めて非常に慎重になるべきかと思います。何をもって客観的な事実を正しく小学生に伝えたかということは非常に難しいと思うのですが、その辺りは十分準備を重ねて、現場でも対応していただきたいと思っております。

◆教育長（竹内悟）人権も含めて社会科の学習においては、子どもたちの知識とか思考というのがいろんな角度からあって、学びの量が多いですよね。要するに、公民もあれば地理もあれば日本史、世界史もある。それが先生の授業づくりによっては学び方がどんどん薄いものになってしまう可能性があるので、学びをより深めていくためには、どのような工夫が必要かについて教えてもらえますか。

◎指導課長（藤谷考志）各社とも問題解決的な学習が意識され、主体的な学びに向けた工夫はされていますが、特に日本文教出版は、個人で「追求」「解決」「掘り下げた」ことを学級で「深め合う」活動が具体的に示され、多面的な思考や理解につなげる工夫が見られました。

◆教育長（竹内悟）日本文教出版社の追及、解決、掘り下げた、というのは自己調整学習というものとよく似ていて、動機づけがあって、学習方略があって、メタ認知されるというような学び方なのですが、日本文教出版のそういった丁寧な構成というのは、若い先生が増えてきている中でも、非常に教えやすいし、児童個人も非常に学びやすいかなとは思います。

◆教育委員（西尾剛）戦争とか人権とか歴史となると、それぞれ皆さん考え方があって、イデオロギーとか政治的な立場から、万人がこれだという教科書を作成することも選定することもなかなか難しいと思うのですが、ただ１点だけ言えることは、人を育てるというのは結局、自己肯定感をいかに高めていくかということだと思うんですね。ですから、教科書を選ぶ上で、いろいろな配慮をしないとだめなんですがよく配慮した上で、なおかつ日本人として自己肯定感が持てるような内容になっているかという観点から選ぶことも大事なんじゃないかなと思います。

◆教育長（竹内悟）社会の教科書で話は尽きませんが、採択に入りたいと思います。今の質疑やご意見、ならびに選定委員会の報告書をふまえると、日本文教出版がいいように思いますが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）それでは、小学校社会の教科用図書は日本文教出版の「小学社会」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「地図」に移ります。地図の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います

◆教育委員（澤田久子）地図は２社しかないですが、それぞれの教科書の特徴や違

いがあれば教えてください。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）東京書籍は、豊富な情報量に加え「ホップ・ステップ・マップでジャンプ」のコーナーがあり、問いや作業に楽しく取り組むための工夫があります。

帝国書院は、３年生から６年生までの各学年での学習内容に応じた内容が充実していて、160 万分の１の「広く見わたす地図」など、児童の発達段階が考慮されています。

◆教育委員（池島明子）先ほど国語の時にも質問したのですが、国語と書写に関連性があるように、社会と地図帳も関係があると思いました。また、私が見た感じでは、地図として見慣れているのは帝国書院の方かなという感じがしました。

◆教育委員（奥健一郎）対する東京書籍ですが、例えば 62 ページのヨーロッパのいろいろな世界の料理とか、82 ページの日本食文化ということで郷土料理の写真が載っているとか、こういった細かいところまで写真が載っていて非常に興味が湧いて面白いという気はしました。

◆教育委員（西尾剛）帝国書院の山の描写が、イラストで尾根とか谷とかが本当に細かく、虫眼鏡で見ないとわからないくらいですが、そういう点が非常によくて、好感が持てました。

◆教育委員（澤田久子）その他に特色はありますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）地図は情報量が多いので、どちらの教科書もフォントや色使いによって、少しでも見やすくなるように工夫されています。

東京書籍は世界の国の文化や挨拶などがたくさん掲載され、多様な言語・文化に興味をもつきっかけがあります。また、デジタルコンテンツも充実していて、ドローンの映像やクイズなどがあります。

帝国書院は SDGs や防災・減災の特設ページが用意されるなど、他教科での活用が意識されています。また、独自開発した「UD（ユニバーサルデザイン）学参フォント」が使用され、より見やすくするための工夫があります。

◆教育委員（西尾剛）今おっしゃった点ですが、確かに両方とも情報量が非常に多くて、情報量を多くしようとすればするほど、文字が増えて何となく見にくくなる。だから、情報が多いということと地図の見やすさは相反するもので、なかなか難しい点があると思うのですが、率直に申し上げて、私には両方ともあまりにも情報量が多すぎて、見やすいとは思わないです。ただ、どちらかと言いますと、帝国書院の方が活字も大きいのもあれば小さいのもあって、比較的見やすいかなと思います。ある程度情報量を増やす以上仕方がないとは思いますが。

◆教育長（竹内悟）ありがとうございます。ほかに意見はありませんか。ないようですので地図の採択を行います。今までの意見等を聞いておりましたら、２社ともに工夫されておりますが、帝国書院の方がいいように思いますが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校地図の教科用図書は帝国書院の「楽しく学ぶ小学生の地図帳」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「算数」に移ります。算数の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（西尾剛）算数が嫌いという子も多いと思うのですが、教科書を採択するにあたって、大切な視点というのはどういうところでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）算数は基礎的・基本的な概念や性質を理解すること、見通しをもって筋道を立てて考察したり表現したりする力をつけること、学んだことを実際の生活でいかす態度などが求められていますので、これらがバランス良く扱われることが重要ではないかと考えています。

◆教育委員（西尾剛）具体的に各社の特徴はどんなものでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）どの教科書もよく考えられ、工夫されていますが、その中で特徴的なものをそれぞれ紹介いたします。

東京書籍はICT活用が意識された内容になっていて、導入で課題を共有するための動画や、長さや面積、割合を視覚的に捉えるためのコンテンツがあり、言葉や数字だけではわかりにくかったこともイメージしやすくする工夫があります。

大日本図書は、入学初期の活動のための分冊があり、就学前施設からの接続が重視されています。また、２年生以降の教科書では、「算数の大切な考え方」のページがあり、演繹（学んだことで説明する）・帰納（いくつか調べてきまりを見つける）・類推（前と同じように考える）・発展（他ではどうなるか考える）の考え方が示されています。

学校図書は、子ども主体の授業を実現するために、身近な疑問を見つけることを大切にした導入が設定されています。また、対話を通して多様な考えに触れることで、学びに広がりを持たせる工夫が見られます。

教育出版は、問題発見力・解決力・追求力を育成するというモデルを示し、「はてな・なるほど・だったら」のサイクルで主体的・対話的で深い学びの実現をめざす構成となっています。

啓林館は、学びに向かう力の育成と評価が重視されていて、単元の入り口では興味関心をもち、出口では児童が自らの学びを総括する場面や、学んだことを活用・探求に取り組む場面が設けられています。

日本文教出版は、学習の進め方・ノートの取り方・作り方が巻頭で非常に丁寧に示されていて、児童にとっても教師にとってもお互いに見通しが持ちやすくなる工夫が見られました。

◆教育委員（池島明子）実は私の息子が算数嫌いなのですが、算数嫌いになる原因とか学年とかがあるのでしょうか。算数を１回嫌いになると本当にもう修正がきかないというか、後戻りできない。大学で授業をしているのですが、大学生になっても算数が苦手だという子がたくさんいます。

◆教育委員（澤田久子）一番わからなくなるのは４年生だと思います。一気に抽象的になるんですね。それまでは結構具体的なので、具体物も使ったりして説明できるのですが、４年生になるとすごく抽象的になるので、すごく難しい。割り算が入ってきたら、かけ算も引き算も使わないといけないし、いろいろなことを頭の中でいっぱいしないといけなくなるので、その辺りがすごくつまずきになるところだと思います。

◆教育委員（奥健一郎）今重要な指摘がありまして、一見してみても４年生になってから急に抽象的になるという。ただ、逆にそういうケースも含めて子どもたちが算数は面白いなと感じて学習するためには一体何が必要なのかをお教えいただきたいです。

◆教育長（竹内悟）澤田先生いいですか。

◆教育委員（澤田久子）計算ができるというのは大切なことだと思うんですけれども、私たちも日常では電卓を使ったりパソコンを使ったり、機械を使って計算することも多くなってきているので、そればかりじゃなくて、何か自分で気づいて、「あ、わかった！」とか、「そうなんや！こうなってたんや！」とか、そういうふ

うに感じると、すごく算数が好きになるということがあると思うんですね。特に、日常生活で算数を使っていければ、「勉強しておかないと損するな」と感じられる。例えば、買い物の時に何％引きとか何割引きがわからなかったら困る。生活と繋がっていることで面白さを感じていくと思うので、そういう工夫がなされていたらすごくいいのかなと思いました。

◆教育委員（西尾剛）おっしゃられていたように、４年生になると話が抽象的になっていって、一気にできない、苦手になる子が増えるということなんですけれども、自分を振り返っても確かにそうだったなと思うのですが、しかしそれを乗り越えるには、学校でわかるように先生が教えてくれるということと、教えてもらったことを繰り返しして身につける、自分１人でできるようになるまで練習するしかないと思います。教科書だけ読んで、わかったとは、なかなかなりにくいかなと思います。

◆教育委員（池島明子）漢字の練習も同じだと思うのですが、算数も計算問題がバーッと並んでいるのをこつこつ解くこともちろん大事だと思うんですけれども、その先に、ただ「やらされてやった」というだけではなく、何か達成感を感じたりとか面白さに気づいたりとか、その辺のバランスがすごく大事なんじゃないかなと感じます。

◆教育委員（奥健一郎）池島委員がおっしゃった、こつこつやってきた達成感を感じるというのは、社会人も大事なことだと思うんですけど、逆に気づいたり考えたりするという面白さを子どもたちが感じられる工夫がされている教科書はどんなものがあったか聞きたいです。

◎指導課長（藤谷考志）東京書籍は、登場する人物の吹き出しの続きを考えることから、思考を促す箇所が比較的多く設定されているという特徴がありました。

　大日本図書と学校図書は、対話的な学びにつながる箇所が多く設定されているところが特徴的でした。これらの工夫により、考え気づく面白さを感じる機会が設定されていると考えられます。

◆教育委員（奥健一郎）では、先ほど出た子どもたちがコツコツと取り組んで、達成感を得る、これも非常に重要なことですよね。そのための工夫があるのはどの教科書なんでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）東京書籍、大日本図書、啓林館、日本文教出版は、ＱＲコードのコンテンツが比較的豊富で、自学自習に取り組みやすいと考えます。なかでも東京書籍は練習問題に自動判定機能があり、大日本図書と日本文教出版にも、一部の問題に自動判定機能があります。

◆教育長（竹内悟）ここ最近、若い先生方の算数の研究授業を見にいくと、導入の仕方から振り返りまでの 45 分間の流れというのを、みんな苦労して作っていますが、今の説明と実際に教科書を見させてもらうと東京書籍の単元の流れというのは非常に安心して授業に望めるんじゃないかなと思いました。45 分の使い方がすごくわかりやすい。一方で教育出版は、どちらかというとベテランの先生というか、先生方の今まで積み上げてきた、その先生の力量の、その先生にしかできない、そういう授業がしやすい。内容を詰め込み過ぎず、その先生の自由度、力量が試されているような中身だと感じました。両極を言わせてもらいましたが、今の教員の流れを考えると、これからもどんどん若手の先生が来て、ＡＩが入ってきて、どの先生も同じような授業ができることをめざしていると中央教育審議会でも話し合いをされているのも聞くので、その辺を泉大津の教育委員会がどういうふうに考えるかというのは非常に難しいところだとは思います。実際、若手教員が増えてきている現状考えると、その方向の教科書を選んでいかないといけないのかなとは思ったりもしました。

◆教育委員（奥健一郎）東京書籍、教育出版のお話しをされましたが、算数の基礎のつまずきというのは、私も実はつまずいたことがありまして、それをなくすためには教科書の見やすさ、わかりやすさ、練習量に着目するとことも大事だと思うのですが、そういった観点から見ても、東京書籍と教育出版が非常にシンプルでいいんじゃないかと思いました。

◆教育長（竹内悟）ありがとうございます。議論は尽きませんが、算数の採択をいたしたいと思います。今の質疑と選定委員会の報告書をふまえると、東京書籍が良いのではないかと思いますが、ご異議ございませんか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校算数の教科用図書は東京書籍の「新しい算数」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「理科」に移ります。理科の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（池島明子）理科も５社と多いのですが、理科の学習も非常に興味づけることが難しいと思うのですが、その学習を充実させるにあたって、大切な視点はどんなことかお教えください。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）理科の学習は、あくまでも自然現象について科学的な視点で理解することが重要なので、児童の身の回りのことに関連付けて、問いや課題を見出すことが重要と考えます。そして実験結果などの知識のみを身につけるだけではなく、よりよい実験方法を考えたり、結果から新たな問いを見出したりする学習活動を通して、学びを広げ・深めることが求められていると考えられます。

◆教育委員（池島明子）例えば、実験は実験だということではなく、児童の身の回りに関連していることが大事だというふうに聞き取れたのですが、それに対する工夫がされているような教科書について教えていただけますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）どの教科書も日常に疑問をもち、問題を見つけることから学習が始まり、実験を行う際には「予想→計画→観察・実験→結果→考察→まとめ」という流れを踏まえて構成されています。

東京書籍は、児童が自ら問いをもつために、単元の導入では、まず「レッツトライ」の活動があり、単元名やめあてはその後に配置されている工夫があります。

大日本図書は、大判のページにより、全ての単元で問題解決の全過程を掲載し、見つけよう・調べよう・伝えようの過程を３色のラインでつなぐなど、活動が何に当たるのかを分かりやすくする工夫があります。

学校図書は、学習したことを活用する物づくりが紹介され、体験的に学習を振り返る工夫があります。

教育出版は問題解決の流れが明確に示されており、さらに各学年で主に育成をめざす問題解決の力を育てる場面を示すという工夫があります。

啓林館は、問題解決の過程を「見つける・調べる・まとめる」の３段階の学びのサイクルとして深めていく構成になっています。

◆教育長（竹内悟）理科の授業というのは、実験が非常に大きなポイントになってくると思います。どの教科書もしっかりと実験の中身が書かれていて、非常に面白いなと思いますが、なぜか実験方法が全て書かれているので、なぜその実験方法に至ったのかという、そこを子どもに考えさせるというところも、もう少し明確になったらいいのかなという思いはあります。先ほどから僕は教員サイドのことばかり話をしているのですが、若い先生は失敗をしたらパニックになってしまって、子どもたちに指摘されて、その授業が成立しなくなってしまうことが非常

に最近多いという報告を受けます。その失敗はなぜ失敗したのかという疑問に先生がもっていくことができない。そこが非常に苦しいところで、実験は、すごくいい教育材料だと思っているんです。だから、わかりきったような実験もいっぱいしないといけないとは思うんですけど、でもその実験によって、実験の結果だけでなく、そのプロセスから失敗からいろんなことを学ぶことができる。非常に面白い教科だと考えています。

◆教育委員（澤田久子）今、実験という言葉が出てきましたが、実験というのは危険を伴うこともたくさんあって、ニュースなんかに出たりして、こんなことが起こってしまったんだなと思ったりするのですが、危険が伴うことも理解させていかないといけなので、安全も含めて配慮されている点で特徴的なものがあれば教えていただければと思います。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）全ての教科書で安全な学習のための記載がありますが、特徴的なものをあげさせていただきます。

　啓林館は全ての器具について、使い方を動画で確認できるよう、ＱＲコードが掲載されています。

　教育出版は教科書を開かなくても裏表紙に安全の手引きを掲載することで、目にとまりやすくする工夫があります。

　学校図書は、注意点だけでなく、怪我・やけどなどがあったときの対応まで掲載しています。

◆教育委員（池島明子）実験結果から学習をさらに広げる、夏休みの自由研究の課題の問題点を考えるのも、そういったところから考えるのではないかなと思うのですが、学習を広げたり深めたりするような工夫がされている資料、教科書はありますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）どの教科書も実験結果と生活とのつながりが紹介されていました。その中で、学校図書は、実験を通してわかったことから、新たな疑問を生み出し深めていくという学びを継続させる工夫がありました。

◆教育委員（西尾剛）今おっしゃった学校図書ですけれども、私も面白いなと思ったのは、６年生の実験で、ビンの中に火をつけたろうそくを置いて、しばらくしたらろうそくの火が消える。なぜ消えるか。ほとんどの教科書は、消えた結果から、ビンの中の空気中の酸素が減って、その代わりに二酸化炭素が発生したから消えたのだろう、と書いています。しかし、酸素が減ったとしても、決して酸素がなくなったわけではなくて、割合にしたら空気中の酸素の２割ぐらいが減って、それが二酸化炭素に置き換わっただけで、空気中に依然として酸素は８割残っているわけですよね。二酸化炭素も増えたと言っても酸素が減った２割ほどが二酸化炭素と窒素に置き換わっただけで、決して二酸化炭素が充満したわけでもない。なのに、消えると。もう一回そこに火のついたろうそくを入れたらどうなるかというと、やっぱり消える。酸素が８割も残っているのに何で火がつかないんだろう、私が教科書をいろいろ読んだときに、ふとそういう疑問をもったんですけれども、その答えはどの教科書にも書いてない。書いていないのは、ひょっとしたら小学校で学習するレベルを超えるからかもしれませんけれども、唯一学校図書だけは、なぜ酸素が残っているのに火が消えるのか。そもそも、火が消えた理由というのは、酸素が減ったから火が消えたのか、それとも、二酸化炭素がちょっと増えたから火が消えたのか、どっちなんだ。それを、新たな実験で、確かめてみよう、発展問題的にそういう実験をやってみようというのがあって、答えは載っていないからわからないのですが、よく考えているなと思いました。

　あともう一つ、学校図書でよかったと個人的に思ったのは天体の月の満ち欠け

です。要するに、月が地球の周りをまわっているから、どちらから太陽があたっているかによって、満月になったり新月になったり三日月になったりするという理屈ですが、それはどの教科書にも、ボールを手に持って、自分を地球としてぐるっとまわってみたら、確かにそのボールの光っているところが増えたり減ったりする様子がよくわかる。そういう実験をしようと書いているのですが、その中でも私が見る限り学校図書が極めてわかりやすいというか、もうこれでもかというぐらい詳しく書いていてよかったなという感じはしました。

◆教育長（竹内悟）他の特徴等があればお教しえ願えますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）東京書籍・大日本図書・学校図書は、掲載されているＱＲコードの箇所数が多いという特徴がありました。

◆教育長（竹内悟）教科書の大きさは、東京書籍と大日本図書が非常に大きい。

◆教育委員（西尾剛）どの社も、写真とかが鮮やかすぎるほどきれいで、どれを見ても遜色はなくて、子どもにとってはものすごくいいだろうなとは思います。

◆教育長（竹内悟）ご意見、感想を聞かせていただきました。理科の採択をいたします。今の質疑と選定委員会の報告書を踏まえると、理科の教科用図書は学校図書が良いのではないかと思うのですが、ご異議ございませんか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校理科の教科用図書は学校図書の「みんなと学ぶ　小学校理科」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「生活」に移ります。生活の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（奥健一郎）生活という用語自体が非常に幅広い言葉を扱うものであると思うんですけど、教科書を採択するにあたって大切な視点をご説明いただきたいです。

◎指導課長（藤谷考志）生活科は生活に必要な習慣や技能を身に付けさせるために、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考え、気づき、理解を深める教科です。小学校１・２年生の教科ですので、発達段階に応じた問題解決能力やコミュニケーション能力など、生活を豊かにする力が形成できるものになっているか、という点が大切であると考えます。

◆教育委員（澤田久子）その観点で見たときに、それぞれの教科書の特徴を教えていただけたらと思います。

◎指導課長（藤谷考志）どの教科書もよく考えられ、工夫されています。

東京書籍では、各単元の見出しに３種類のマークを記すことで、評価の３観点との関連がわかりやすくなる工夫があります。

大日本図書では、児童一人ひとりの気づきや考えが学級全体の協働的な学びにつながるよう、吹き出しが効果的に配置され、グループでの具体的な活動例が示されています。

学校図書では、「みえる・つながる・ひろがる」の観点を大切にしていて、活動の必然性に気づき、活動と活動がつながりあるものになり、振り返りで次の学びへ広がることを促しています。

教育出版では、「わくわくすいっち」のページにより児童の多様な思いや願いを引き出し、みんなで授業や活動の動機付けを行うことにつなげる工夫があります。

光村図書では学習活動が一覧できるように、見開きで完結する構成になっていて、学習の流れがわかりやすくなる工夫があります。

啓林館では「導入・活動や体験・伝え合いや振り返り」の連続した学習過程を

大切にし、児童の思いや願い「もっと〇〇したい」と意欲を高めることにつながる「めくり言葉」が設定されています。

◆教育委員（奥健一郎）ＱＲコードについては、他教科でも充実している教科書が多いですが、生活科の教科書ではどうですか。

◎指導課長（藤谷考志）どの教科書にもＱＲコードは掲載されていますが、その数には差があります。特に多い東京書籍と大日本図書の教科書には、豊富なコンテンツが用意されています。

◆教育委員（西尾剛）確かにＱＲコードからいろんな資料にアクセスできて便利ではあるのですが、生活科は低学年の１・２年生が使うもので、生活科ができたのは、旧来の理科と社会では、先ほどから意見として出ている知識偏重で、低学年として向いていないのではないか、好ましくないのではないかということからできたと思うんですね。それを鑑みれば、確かにＱＲコードで、どんな植物があるか、どういう動物や昆虫がいてどういう生活をしているのか、写真や動画、図鑑にアクセスできて、わかりやすいと言えばわかりやすいのですが、気をつけないといけないのは、動画を見たり写真を見たりしただけでわかったような気分になってしまって、例えば、先生が「はい、ＱＲコードで見てね、こういう生活しているね、はいわかったね、じゃあ次いこう」ということになれば、上っ面の知識が増えるだけでよくないと思います。実際に植物そのものを見て、さわって肌触りがどうかとか､実際どういう場にいるのかとか､そういうことを実感しないと、特に低学年のうちはダメだと思います｡ＱＲコードの重要性は否定しないですし、特に中学年とか高学年なると非常に重要だと思うのですが、低学年のうちはあまり頼るのもよくないんじゃないかなと思います。ＱＲコードで見てみよう、でも実物も見てみよう、というような注意書きが教科書にあるぐらいの方が低学年はいいと思います。

◆教育委員（池島明子）泉大津市の特徴としてスタートカリキュラムの取組みや一人一台端末の活用に力を入れていますが、関連する内容について、教科書ではどのように取り扱われていますか。

◎指導課長（藤谷考志）スタートカリキュラムについてはすべての教科書で扱われてはいますが、特にページ数を多く使い丁寧に扱っているのは、啓林館、光村図書、東京書籍の教科書でした。

　また、一人一台端末を使用する上でのマナーやモラルについては、教育出版・啓林館・光村図書・学校図書の教科書で重視されていました。

◆教育委員（澤田久子）ちょっと違う視点ですけど、教科書って本当にいろんな大きさとか重さとかがあって、特に生活科は１・２年生の扱う教科書なので、重さとか大きさとか、だいぶ負担がかかるなと感じたのですが、どうでしょうか皆さん。

◆教育委員（池島明子）澤田委員がおっしゃったみたいに、大きいと１年生でランドセルがどれだけ重たいの、というぐらい運ぶのが大変だと思うのですが、でも視覚に訴えるというか、大きい教科書の方が情報量が多いし、見やすいし、ダイナミックな感じも個人的にはしました。

◆教育委員（西尾剛）教科書どれもそうなんですけど、例えば草の中に虫がいるとか、そういうのがたくさん出てくるんですが、色覚特性の子、特に赤緑色盲といって赤と緑の区別がつきにくい子が非常に多いんですね。同じ緑でも、薄い緑と濃い緑、薄い赤と濃い赤があると、色が濃くてコントラストが強い方がよくわかるんです。コントラストが弱いと区別がつきにくくて、じっと見ないとわからない。特に昆虫が葉の上に乗っているとかのイラストがどの教科書にも出てくるんですけれども、色覚特性の子も見やすいように、関係のない草は薄く、重要な昆

虫とかは色を濃く、コントラストを変えていただくと非常に見やすくなると思います。そういう点から言うと、私が見た限りでは、東京書籍と光村は割とコントラストが強く描かれていて、見やすいのかなと思いました。

◆教育長（竹内悟）私も色覚に特性があり、今、委員が言われたことを非常に嬉しく捉えています。

◆教育委員（西尾剛）私もそうなんです。

◆教育長（竹内悟）そういうことも踏まえて、１・２年の教科書ですので丁寧さとか優しさという部分は、より必要なのかなと思うのですが、その辺りで選定委員からの意見が何かあれば教えてください。

◎指導課長（藤谷考志）追加のご説明になりますが、教育出版と光村図書の教科書には人気の絵本のキャラクターが扱われていています。特に光村図書では「そんなこともあるかもね」というコーナーで、初めてのことや失敗、一人ひとりの違いについて、優しい雰囲気で安心して前向きにとらえることを促す工夫があります。

◆教育委員（西尾剛）個人的にいいなと思ったのは、光村がキャラクター・図柄が、有名な絵本作家のイラストということですが、非常にほのぼのとしてというか、子どもってこういうことするよなということが、パッと見たらわかって非常に良いなと思いました。例えば、最初の扉絵は、入学したときに見たら非常に楽しくて、子どもたちもウキウキするんじゃないかなと思います。このキャラクターが随所に出てきて、非常にほのぼのした感じがあっていいなと思います。

◆教育長（竹内悟）キャラクターで言えば教育出版の「こんがらがっち」も人気と聞きました。

◆教育委員（池島明子）光村は上に「広がる生活辞典」という取り外しができるようなものがあって見やすいかなと思いました。

◆教育長（竹内悟）時間となりましたので、生活科の採択をいたします。今の質疑と選定委員会の報告書をふまえると、光村図書がいいのではないかと思うのですが、異議はございませんか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校生活の教科用図書は光村図書の「せいかつたんけんたい」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「音楽」に移ります。音楽の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

音楽の教科書会社は２社しかありませんが、それぞれの教科書の特徴や違いはどうですか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）どちらの教科書も児童が主体的に学習に取り組むための工夫が盛り込まれており、知識や技能の習得にとどまることなく、児童の気づきや考えを重視した構成となっております。

教育出版は見開きの右ページに「音楽のもと」としてその曲を形作っている要素が簡潔に示されています。中・高学年ではメモ欄を設けて、児童が自ら聴き取ったり感じ取ったりしたことを書き込める工夫をするなど、児童が主体的に学ぶための工夫があります。

教育芸術社は、子どもたちが「何を学ぶか」「何ができるようになるか」をわかりやすく示すために、学習活動を「考える（思考力、判断力、表現力等）」「見つける（知識）」「歌う・演奏する・つくる（技能）」の資質能力に対応するように構成されています。どのように学ぶかをわかりやすく示すことで、子どもたちの主体的な活動を引き出す工夫になっています。

◆教育委員（奥健一郎）私自身、子どもの頃音楽に苦手意識があったのですが、音楽という教科に関心が低かったり苦手意識をもったりする児童が取り組みやすい工夫はありましたでしょうか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）どちらの教科書にも工夫があり、写真の掲載の仕方やＱＲコードの掲載、英語の歌の紹介など、様々な角度から児童が楽しく学習に取り組むための構成となっていました。

教育出版は、体を動かす活動、美しい写真、世界の音楽と日本の音楽など、児童が音楽の楽しさや美しさに触れるための工夫がありました。

教育芸術社は、全ての歌についてＱＲコードが掲載されていて、読み取ると簡易演奏ではありますがその曲を聴くことができる工夫があります。

◆教育委員（池島明子）教育芸術社は、簡易であっても音楽をダイレクトに聞けるということは、楽譜を見ながらイメージするうえではすごくメリットじゃないかと思います。

◆教育委員（奥健一郎）自分で聞きたいときに聞けるという仕組みは、授業以外でも音楽に触れる機会がかなり増えるので、非常に効果があるものだと思います。

◆教育委員（澤田久子）教師も、音楽専科の方だったらいくらでも弾いたりできると思いますが、低学年は特に専科じゃない人が担当することもあると思うので、ＱＲコードで聞けると、授業の時にありがたいと思います。

◆教育委員（西尾剛）ＱＲコード以外で何か特徴的なことがあれば教えてください。

◆教育委員（池島明子）教育出版は、全校合唱として１年生から６年生まで同じ曲が２曲ありました。「さんぽ」と「音楽の贈り物」があって、「さんぽ」というアニメに使われていた曲に関しては、体を動かしたり手話での説明があったりして、１年生から６年生までを通して掲載されているというのは特徴だと思いました。

もう１点、これも教育出版ですが、「ショートタイムラーニング」という、日本語の歌詞が書いているものが前の方にあって、英語版が後ろの方に載っている。英語教育と言ったらあれかもしれないですが、我々の古い時代かもしれませんけれども、カーペンターズとかローリングストーンズとか、外国の歌詞の意味を知りたいという興味づけから英語に興味を持ったり、自然な発音が音楽を通して耳に入ったりということもあるのではないかと思ったので、その辺りは教育出版が特徴的だと感じました。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）他に特徴的なものとして、教育出版は、文科省唱歌も数曲多く掲載するなど、歌唱について取り上げている曲数が多くなっています。

教育芸術社は、器楽について取り上げている曲数がやや多く、発展的な内容についても多く触れられています。

◆教育委員（西尾剛）教育出版は、大きな写真を使っていて、イメージが膨らませやすいかなと思いました。

◆教育委員（池島明子）教育出版は実物大ほどの鍵盤ハーモニカの写真があって、そのまま指を置いて説明してくれているような感じがしてわかりやすいかなと思いました。

◆教育委員（澤田久子）同じページのところで、鍵盤ハーモニカが、五線譜とも関連できるような、音階が意識できるような表記になっていると思います。

◆教育長（竹内悟）今までの意見等を聞いておりましたら、２社ともに工夫されておりますが、教育出版の方がいいように思いますが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校音楽の教科用図書は教育出版の「小学音楽　音楽のおくりもの」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「図画工作」に移ります。図画工作の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。
◆教育委員（澤田久子）図画工作の教科書会社も２社しかありませんが、選定委員会としてどのような意見が出たか教えていただけますか。
◎指導課長（藤谷考志）２社ともによく工夫されております。
　開隆堂は、「学習のめあて」を資質・能力の３観点で示していて、当該題材で重点的に育成を図りたい資質・能力について強調するなど、児童だけでなく指導者にとってもめあてが分かりやすくなっています。
　日本文教出版は、「学習のめあて」の３観点を５項目で示すことで、表現と鑑賞を往還しながら学習することを大切にしている特徴があります。
◆教育委員（澤田久子）特にＱＲコードを活用することが有効になると思うのですが、教科書による特徴はありますか。
◎指導課長（藤谷考志）どちらの教科書もＱＲコードを活用し、道具の使い方や様々な作品について詳しく見ることができる内容になっています。ＱＲコードの掲載数では大きな差はありませんが、コンテンツの数は日本文教出版の方が豊富に用意されていました。
◆教育委員（奥健一郎）図画工作の創造的な学習を進めていくうえで教師の課題、児童の課題となっているのはどのようなことがあるんでしょうか。
◆教育長（竹内悟）学校訪問をした時に各校の図工の作品を見ていると、画一的で個性が見受けられない作品が並んでいることが多い、何か工夫がないのかなと感じています。多分教師サイドの課題だと思うのですが、問題提示する時の、提示の仕方に教科書の中でヒントがあれば嬉しいなと思いながら見させていただきました。もう１点は、カリキュラムの問題で、年間時数が減りましたので、図工室を使ってまで図工の時間を活用しようという先生が本当に少なくなったと思います。この流れでいくと、図工室は必要なくて他の教室に活用した方が使用頻度も上がるという具体な話も出ていたりするのが現実です。
◆教育委員（澤田久子）画一的な作品ができやすいということでしたが、教科書の中に、出来栄えというよりも、偶然性の面白さというか、できるまでのプロセスを楽しむというか、そういうことが図工ではすごく大事だと思うんですね。そういうことでは、日本文教は握っただけの粘土だったり、光のプレゼントみたいなものの制作過程で光を楽しむということが書かれていて、できた作品というよりもそういうプロセスがたくさん書かれてあっていいと思いました。
◆教育委員（池島明子）日本文教の方が、例の絵や作品がダイナミックだったり力強かったりというようなイメージです。開隆堂の方は、すごく芸術的で見た目がきれいで緻密というように感じました。例えば、６年生が水墨画を描いてあって、書写の授業と繋がるかわからないですが、その写真１枚とっても、日本文教はダイナミックな形があったり、平和を願ってというところでゲルニカの写真をもとにして児童が考えた大きな写真があったりして、広がりができやすいのは、個人的にですが日文かなと思いました。
◆教育委員（西尾剛）日文の方は、創作活動をしている子どもの全身の写真を載せているのが良いかなと思います。先ほどおっしゃった、教室の後ろに飾ってある作品はどれもよく似たものだという話ですが、おそらく描く方からすれば、絵を描くときの評価のポイントがわからない。何をどういうふうに描けば評価が高くて、どう描けば評価が悪いのか。事前に示されているわけじゃないので、担任の主観次第ということもあるのかなという気はします。

◆教育長（竹内悟）学習指導要領に観点がありますが、それにあまりにも忠実にいくと、同じような絵になってきます。だからそこに子どもたちの自由度というか発想の豊かさとかいう部分に、もっと重要度を置いていくと少し変わってくる。

◆教育委員（西尾剛）小学校時代のことを思い出すと、絵を校内コンテストに出すために全員描かされて、１人ずつ持って前に立たされて、どれがいいかみんなで品評をし合う。子どもも先生も、どれがいいか、だいたい一致するんです。ところが、コンテストなので専門家の方が来て、その人が最後は選ぶのですが、選んだ作品が、全然みんなから評価されていない、なにそれと言われていたものが、一位に選ばれたという記憶がいまだに残っています。だから、絵というのはなかなか難しい。確かに今思えば、その子の作品はちょっと桁違いで、創造性があると言えばありました。

◆教育長（竹内悟）泉大津市は、児童の美術についてはものすごく教員が研究してきて、小学校の美術については、全国的にも、よく学ばしているというような流れがずっとあったんですけど、そこで勉強してきていた美研の先生方がどんどん退職されたりして、後継している先生方が今いなくなっていて、どうしても指導書に頼ってしまうところがあったりして、余計に僕もそれを強く感じているのかなという流れです。

◆教育委員（池島明子）絵に関しては、作品を作るようなアプリがあって、誰々っぽい作品とかがすぐ出てきたりするのですが、そういう時代になると余計に個性というか、枠にはめた作品を求めるのではなくて、もともとの基本的な技術のぼかすとかを教える必要はあるんですけども、枠にはめる作品を求めない教育という方が大事なんじゃないかと私は思います。

◆教育委員（奥健一郎）これも参考かもしれませんが、我々社会人もそうだと思いますが、仕事と作業では意味が違うと思うんです。要はその児童が、自分なりに前向きに自主的に作ろうと思って作ったというプロセスが大事で、それがさせられている作業になっているということが問題。そこが非常に違うので、結果としては作品でしょと思うかもしれませんが、私の個人的な意見から言うと、それ以上のその過程、作業じゃなくて精度のある仕事人としてきちっと仕上げたのかどうかだと思います。

◆教育長（竹内悟）全然話は違いますが、日文の写真でマスクが多いのは気になりました。それでは、図画工作の採択をいたします。今の意見等を聞いておりましたら、２社とも工夫がされている中で、日本文教出版の方がいいように思いますが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校図画工作の教科用図書は日本文教出版の「図画工作」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「家庭」に移ります。家庭の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います

◆教育委員（西尾剛）家庭の教科書会社は２社ですが、それぞれの教科書の特徴はどうですか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）東京書籍は、全ての単元を「見つめよう」「計画しよう・実践しよう」「生活に生かそう・新しい課題を見つけよう」の３ステップで展開し問題解決的な学習にする工夫が見られます。ＱＲコードから見ることのできる作業の動画は右利き左利きどちらも用意されています。

開隆堂も、各題材を全て問題解決のプロセスに沿った３ステップで構成されて

います。作業の手順を示す番号の表記などがはっきりと強調されていて、わかりやすいという工夫がされていました。

◆教育委員（西尾剛）他に特徴はありましたか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）東京書籍は、季節による住まいと衣服の学習がまとまっているなど、単元の数が少なく構成されていました。また、日本の伝統的な生活に関する記載が多いことや、SDGs についてまとめたページがあることも特徴的でした。

開隆堂は、食物アレルギーに関する記載が充実していました。また各単元で安全に関する注意点も記載されるなど、配慮がなされていることが特徴的でした。

◆教育委員（澤田久子）東京書籍ですが、単元がまとまっているのは本当に指導計画上とってもありがたいなと思います。実習にかなり時間がかかってしまうので、単元をまとめてくれているとやりやすいかなと思います。

◆教育委員（奥健一郎）先ほどの図画工作とは違って、個性をもって作れば結果はどうでもいいということではなくて、逆に家庭の場合は基礎的な技能を全員が身に付けることが重視されると思いますが、そういった観点で教科書に差はありますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）教科書自体に大きな差があるようには思いませんが、授業の時間だけで基礎的な技能が定着することが難しい場合は、各社のＱＲコードが充実しているということが有効なものになるのではないかと考えられます。

◆教育委員（池島明子）泉大津市では給食など、食育に特に力を入れていると思いますが、特徴のある給食を実施されていることが連動して家庭科の教科書に載っていたりすると、すごく魅力的だなと思うんですが、そういった特徴があるようなものはありますか。

◆教育委員（澤田久子）私が見たところでは、東京書籍で、地域の伝統的な料理について割と詳しく扱っているところが、食育と関連する部分かなと思います。また、栄養を考えた食事を取り扱っているページが東京書籍の方が比較的多かったかなと感じます。

◆教育長（竹内悟）それでは家庭科の採択いたします。今までの意見等を聞いておりましたら、２社ともに工夫されておりますが、東京書籍の方がいいように思いますが、みなさんはいかがですか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校家庭の教科用図書は東京書籍の「新編　新しい家庭」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「保健」に移ります。保健の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。

◆教育委員（奥健一郎）それぞれの保健の教科書の特徴から聞かせてください。

◎指導課長（藤谷考志）どの教科書会社も他の教科同様に、それぞれ工夫や配慮がありました。

東京書籍は、１項目について「気づく・見つける」「調べる・解決する」「深める・伝える」「まとめる・生かす」の４ステップ構成になっており、主体的・対話的で深い学びの実現を促す工夫があります。

大日本図書は、折り込みページに工夫があり、単元の導入場面で、展開の内容を隠して集中したり、ヒントを見ながら学習に取り組んだりすることができます。

大修館書店は３ステップの構成になっていて、課題を解決するために調べたり話し合ったりする活動に十分な時間をかけることが重視されています。

文教社は、各章のＭＩＳＳＩＯＮ①②③でポイントを明確に示すことで、課題をしっかりと意識した学習につなげる工夫が見られました。

光文書院は、課題を見つけるところから学んだことを「生かす」場面まで、自分ごととして考えることが重視されています。また、他教科・他領域との関連性が教科書内で示され、教科横断の学び・系統性ある学びの実現を促しています。

学研は、自分で考える場面と友達やみんなと考える場面を、どちらもしっかりとバランス良く取り扱うことで、主体的・対話的で深い学びの実現をめざす内容になっています。

◆教育委員（奥健一郎）保健の教科書では様々な写真・資料を見る機会が多いと思いますが、特徴的な教科書はありましたか。

◎指導課長（藤谷考志）ＱＲコードの記載数については、東京書籍が一番多く、次に大修館書店が多くなっていました。

◆教育委員（池島明子）気づいた点としては、東京書籍は資料が全部多くて読みやすい。また、写真も効果的に大きい写真だったり小さい写真だったりというのを効率よく使っておられるなという印象を受けました。大修館書店もイラストがすごく見やすくて、章の始まりで児童も知っているような有名人の写真とコメントがあるのが興味づけになるのではないかと感じました。光文書院は、太字にするとかして、ここが大事ですよという表現がわかりやすいと思いました。保健というのは学問ではありますが、生きていく中の知識としてすごく大事なことを学ばなければいけないと思いますので、何かインパクトがあるとか、記憶に残るということがすごく大事じゃないかと考えました。

◆教育委員（西尾剛）いわゆる二次性徴は、保健の学習でも重要だと思うし、保護者とかの関心もあると思うのですが、これについて特徴的な教科書はありますか。

◎指導課長（藤谷考志）選定委員会では視覚的なわかりやすさが重要ではないかということになり、大修館書店と光文書院が特に工夫されているという考えになりました。

◆教育長（竹内悟）二次性徴の取り扱いについてですが、中学校でも教えますが、どの会社も、今よく言われている多様性を学ぶとかジェンダーレスの問題とかがあって、それが非常に前に出過ぎているように感じる中で、本来の二次性徴で学ばなければならないことをしっかりと記載されているのは、僕は学研が非常にわかりやすかったと思います。その上で、性教育に繋がっていくのだと思うのですが、男の子と女の子の体の違いがあって、精子と卵子が出て、いきなり生命の誕生にいく。性行為の部分が抜けていて、この部分が載っている教科書はないので、非常に気にはなります。東京書籍の内容が非常に情報量が多く、同じようなことを中学校保健でも多分学ぶだろうというような内容も非常に多くあって、教科書に詳しく書いているので、経験の浅い先生、要するに、日本人的な考え方で照れがあるような内容を教える時というのは、やっぱり躊躇してしまう。そういう意味では、東書の教科書は非常に情報量もたくさんあっていいなと思いました。教えやすいと思うのは、学研の３・４年生の教科書が、非常に流れがあって良かったと思います。

◆教育委員（澤田久子）二次性徴という部分については、特に養護教諭と担任が一緒に連携して教えることも多いと思うんですね。ただ、教師の性別とか年齢とか関係なく、誰もがきちっと教えられるような教科書がいいのかなと思います。包み隠さずというか、隠してより秘密的になってしまうのではなくて、人間の体の神秘というか、そういうものがわかるような教科書がいいのかなと私は思います。

◆教育長（竹内悟）東京書籍は多様性について触れていると思います。

◆教育委員（奥健一郎）東京書籍の新しい保健５・６年生ですが、教科書を開きま

すと、私たちと一緒に学習しましょうということで、たくさん登場人物が出ていて海外の人も入っております。他者との違いを認めようとする、そういう意図が感じられ、私は非常に好感をもてました。

◎指導課長（藤谷考志）追加のご説明になりますが、東京書籍ですが、選定委員会で、一部写真で男性が上半身裸のものがあるという意見が出ました。他の教科書は、すべて男性もラッシュガードのようなものを着用していたため、その差が話題になりました。

◆教育委員（池島明子）ラッシュカードについての話が出ましたが、私は先週の土日に小学校へ水泳指導に行きましたが、小学生はほとんど、屋外のプールだったからかもしれませんが男女問わず着用していたのが現状かなと思います。

◆教育長（竹内悟）それでは、保健の採択をいたします。今の質疑と選定委員会の報告書をふまえて、大修館書店がいいように思うのですが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校保健の教科用図書は大修館書店の「新小学校保健」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、次の「外国語（英語）」に移ります。英語の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思いますが、まずはそれぞれの特徴の説明をお願いします。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）外国語の６社の教科書について、特徴や工夫を報告いたします。

東京書籍では、さまざまな魅力的な言語活動が設定され、学習活動が展開されています。また、分かりやすく適切な評価のための工夫として、教科書に書き込んだ内容から４つの場面での見取りを行いやすくなっています。

次に、開隆堂ですが、巻末にＣＡＮ－ＤＯチェックがあり、児童が単元の終わりに自己評価の記録ができます。学びを可視化して自信をつけるための工夫となっています。またスモールトークなど、コミュニケーションを楽しみながら学習する単元構成となっています。

三省堂では､｢ＨＯＰ～ＳＴＥＰ～ＪＵＭＰ｣で１ユニットに構成されています。ＨＯＰの活動を通して学習の見通しをもち、ＪＵＭＰで実際の場面を想定して表現できるように、ＳＴＥＰで語彙や表現を増やすなど、活動を通してコミュニケーションの力が高まる工夫がされています。

教育出版では、ペアやグループの活動が多く設けられていて、話す内容やコミュニケーションについての気づきや思考を促す工夫があります。活動で使うカードだけではなく使い勝手のいいシールが付属していることも工夫の一つです。

光村図書では、ＣＡＮ－ＤＯリストに加えて学年の重点化領域を示すことで、目標が明確になり評価も適切なものになる工夫が見られます。見開きで１時間という扱いが一貫していることも１時間の内容が一覧できて見通しをもちやすいと考えられます。

啓林館では、各ユニットのゴールに加え、各ステップのめあてが示されることで学習の流れをイメージしやすくなるという工夫が見られます。また、パフォーマンステストに使いやすいトライのページがあり、評価の参考にできるコミュニケーションのポイントも示されています。

◆教育委員（池島明子）ありがとうございます。外国語においてもリスニングなどでＱＲコードのコンテンツはとても効果があると考えますが、特徴のある教科書を教えてください。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）どの教科書もＱＲコードは充実して

いまして、掲載されている数は、平均すると１学年で 60 から 70 となっています。その上で特に豊富なのが啓林館、つぎに東京書籍となっています。

◆教育委員（奥健一郎）英語ですが、語学という特性があると思います。堅苦しい言い方になりますが、英文学の勉強をするわけではないので、英語という語学の基本をマスターすることによって、日常的に使えるようにするとなると、勉強というよりは英語を練習する、英語をトレーニングする、もっと大げさに言うと英語を稽古するというイメージに近いですよね。体に覚えこませるということだと思います。スポーツの基本をマスターするような技能教科であるという観点で教科書を選ぶべきかと思います。またその観点から見た場合に、訓練反復は地味な努力なんですよね。だから、そこをいかに飽きさせずに楽しく感じさせてやれるかという、ここが非常に大きなポイントになってくるように思っております。

◆教育委員（澤田久子）そういう面で３・４年生からも外国語活動という楽しさを継続させるには遊びの要素も必要だと思うのですが、そのような教科書はありますでしょうか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）チャンツやジングルが掲載されている数に注目しますと、光村図書はとても多いです。次に多いのは三省堂となっています。また、歌が扱われている数は、教育出版と光村図書が多くなっています。

◆教育長（竹内悟）好きになるという部分のことで情報提供としまして、学校長をしていたときに学校アンケート必ず取るのですが、子どもに英語が好きですかというアンケートを取ったときに、好きと答える子は３年生は 90%、４年生は 80%、５年生は 70%、６年生は 60%、中学生になると、50%じゃなくて 40%未満になってくるという悲しい結果になります。多分英語あるあるだと思うんですけど。そこの部分をわかった上で、教科書を子どもが見て、小学校５・６年生が、英語楽しい、英語やりたいと思う教科書になってもらいたいというのは、特に強く思います。今、泉大津市も浜小学校でイマージョン教育をしていて、外国語に対する取り組みというのは非常にシビアに僕らも考えていて、慣れ親しんでいるからこそスキルが上がってくるという部分は言わずと知れたことなので。特に、先ほど奥委員が言われたように、語学として学ぶとなったときに、英語イコール暗記・ボキャブラリーを増やすという感じになってくると最悪で、英語嫌いになってくるのかなと思う。ですから５・６年の英語の教科書というのはすごく大事だと思っています。

◆教育委員（池島明子）そういう点で教科書は重要視されていると思うのですが、だんだん嫌いになっていく根本的な原因というか、何があるんでしょうかね。

◆教育委員（澤田久子）いろいろあると思うんですけど、書くということが５年生から始まるというのも一つの大きな要因じゃないでしょうか。

◆教育委員（奥健一郎）書くということも、先ほど作業と仕事のお話をしましたが、仕事を好きになるということと好きな仕事に就くということは違って、例えば、野球が好きだから野球の仕事に就いた、ずっと幸せかというとそんなことはないです。スランプがあったり、とんでもない試合があったりして、好きな仕事についても、その仕事を好きにならなきゃいけない部分が出てくるんです。英語も同じで、英語を好きになるという部分が非常に重要なんです。そこが教師の力量だったり教科書だったりするわけです。だから書く学習にも目的や楽しみが必要なんですが、それが「させられた」となると一気に嫌いになってくる。そこが非常に重要だと思います。これは社会人の仕事と一緒なんですけれども。

◆教育長（竹内悟）難しいなと思うんです。中学校で書けないと点数にならない、評価されないということがあって、それと入試があるということで、そこの部分が強くなる。小学校の特に６年になると、書く練習がどっと入ってくる。これが

何かなあと、非常に懸念材料として僕は思っています。海外の国の義務教育学校は、バイリンガルになっていくわけですよね、普通に。それが中学校、高校にいくとトリリンガルになってくるわけです。その現状と日本と比較したときに、日本の弱さっていうのは露呈しているのかなというのは感じます。

◆教育委員（西尾剛）最初に奥委員が、英語の勉強はスポーツに近い技能教科だと、だから反復訓練しかないと、中学校のクラブ活動のサッカーでも野球でも子どもは喜んで反復訓練しますよね。ですからそれくらいに努力しないとうまく身につかない。でも奥委員がおっしゃるには、反復訓練はあまりにも地味な努力過ぎて、楽しみがないと無理だと。だからいかに楽しいと感じさせられるかが大事とおっしゃっていたのですが、そうすると、書く活動が充実した教科書でも、子どもに楽しいと感じさせるような教え方ないし教科書でないと、良い教科書でも難しいということですね。

◆教育委員（奥健一郎）そういう観点からいうと、東京書籍とか三省堂、啓林館、この辺りは書く活動のバランスが非常に良い。単語の習得も充実した感じかなと思いました。今西尾委員がおっしゃった通り、その扱いは注意が必要だろうと思います。もっと言うと、人というのは仕事であれ勉強であれ、何のためにそれをやるのかという意義･目的が明確になるとモチベーションが出てくると思います。なぜ自分は仕事をしているんだ、何の意義・目的があるんだということ。だから書く訓練だったり話す訓練だったりの英語の勉強をする意義・目的がなんだということが大切。今のウクライナの情勢であったり国際情勢であったり、海外の人もこれからたくさん来て交流しなきゃいけないんですよとか、英語の必要性を時に応じて触れるような話が非常になってくるんじゃないかと思います。そういう意味で扱いが注意かと思っております。

◆教育委員（西尾剛）日本では、英語の必要性は全く感じられないところがあって、浜小学校がしているように授業の中でも、先生が恥ずかしがらずに英語を使うとか、そういう抜本的なところから始めないとなかなか難しい。我々も海外旅行に行って、帰ってきた時は英語も必要だなと思うけれど、一週間くらい経つと日本に慣れてしまって忘れてしまうということがありますよね。だから書くのはなかなか難しい問題があるかなと思います。

話は変わりますが、絵の辞典が各教科書に付属しているのですが、これについては何か特徴はありますか。

◎教育部次長兼教育政策統括監（鍋谷芳比古）開隆堂は、分冊で各学年に１冊の絵辞典があります。

東京書籍と三省堂は、分冊で５・６年共通の１冊の絵辞典があります。光村図書は各学年に１冊ですが、必要に応じて本体から取り外し可能なものです。教育出版と啓林館は巻末に収録されていました。

◆教育委員（奥健一郎）先日裏千家の茶道の稽古を見学させてもらったのですが、今は正座を強制すると生徒が来ないということで、茶道教室の経営は結構大変で、正座はそこそこにして、ある程度したら補助いすを使ったりするそうです。茶道で言うと、きちんと正座をマスターした佇まいは非常に美しくて、それが基本だと思うのですが、そこが崩れているのかなと思って愕然としました。基本の習得って地味で、さっき竹内教育長がおっしゃった通り、時間が経てば経つほど嫌いになっていくわけですよね。嫌いになってしまうと、何年か経って英語の必要性を少しでも感じた時にアレルギーになってしまっていて、英語ができないという先入観が先に立ってしまうと本人の人生に非常にマイナスだと思います。なので最後までなるべく嫌いにならずにいってほしい、ここが全てかなと思っています。

◆教育長（竹内悟）それでは時間ですので、英語の採択をいたします。今の質疑と

選定委員会の報告書をふまえて、光村図書がいいように思うのですが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校外国語（英語）の教科用図書は光村図書の「Ｈｅｒｅ Ｗｅ Ｇｏ!」に決定いたします。

◆教育長（竹内悟）それでは、最後「特別の教科　道徳」に移ります。道徳の報告書をご覧ください。これをもとに、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。道徳の教科書を選ぶポイントとして、大切にしなければならないことは、どんなことでしょうか。

◎指導課長（藤谷考志）１点目は、答えが１つでない道徳的な課題を一人ひとりの児童が自分自身の問題と捉え、向き合い「考え・議論する道徳」の実現に向けて、どのように多様な考えを引き出し､議論を生むかという工夫がされているかです。

２点目は、いじめの問題への対応の充実や、情報モラル教育の観点の内容の充実についての工夫がされているかという点です。

３点目は、評価を行うにあたって、適切な対応及び工夫がされているかという点です。

◆教育長（竹内悟）１点目の「多様な考えを引き出して、子どもの議論を生むための工夫がされているか」という点について、特徴的な教科書はありましたか。

◎指導課長（藤谷考志）特徴的なのは、光村図書と日本文教出版、教育出版でした。

光村図書は「話し合えるクラスづくり」として、４月に話し合いのコツ、５月に友だちとの関係性を築く活動など、道徳の学びの土台を作る、対話の力を育成する内容がありました。

日本文教出版と教育出版は、子どもたちの思考を深めるための手立てとして、役割演技が促されています。また日本文教出版は書く活動、整理する活動も考えを深めるために、具体的に示されていました。

◆教育委員（西尾剛）２点目の「いじめの問題への対応の充実や、情報モラル教育の観点の内容の充実についての工夫がされているか」という点について、特徴的な教科書はありましたか。

◎指導課長（藤谷考志）いじめの教材については、すべての教科書で全学年において取り扱われていました。また、情報モラル教育に関しても、すべての教科書で全学年において取り扱われていました。

◆教育長（竹内悟）他に特徴的なことがあれば教えてください。

◎指導課長（藤谷考志）東京書籍と光文書院は、思考ツールの活用が促されていて、それぞれの考えを視覚化することで議論のきっかけにする工夫がありました。

学研は最重要テーマを「いのちの教育」とし、「いのちの教育」を土台としたいじめ防止の取組みの教材が配置されています。

◆教育委員（奥健一郎）この報告に関して言いますと、教科の特性を話してもらったと思いますが、各社のポリシーとか理念というものが非常に浮き彫りになっていると思いました。例えば教育出版の場合は、終始「羽ばたこう明日へ」というスローガンで、各学年を通じて一貫されていますし、日本文教は「生きる力」をテーマにして貫かれている。東京書籍の場合は、各学年違うテーマではありますが、特に４年生で「ちがうっておもしろい」というところが非常に良いと私は思いました。違いを認める力、宗教の違い、文化の違い、国の違い、人種の違い、こういった違いを認められないから､今､各国や日本でも争いがあるわけなので、この違いを認める力、違うって面白い、これは非常に素晴らしいと思いました。

◆教育委員（池島明子）答えが１つではないという道徳の特徴で、３点目の「評価

を行うにあたって、適切な対応及び工夫がされているか」という点ではどうですか。

◎指導課長（藤谷考志）評価を適切に行うには、児童の考えたことをみとる必要がありますが、そのために有効なのが、ワークシート、振り返り、ノートの記述と考えます。各社の教科書はこれらを活用して、充実した評価につなげようとする工夫がみられました。

◆教育委員（奥健一郎）ワークシートを振り返るという話がありましたが、別冊のノートがついているというのは日本文教出版が非常に特色がありました。現場の先生からすると非常に良いのかなと思いました。

◆教育委員（澤田久子）担任の先生にとっては、ノートを集めれば、後で評価の時に見返せるという利点があるかなと思います。書き方のところを見ても、割と自由度があって、いろんな使い方ができる。担任の力量にもよるかもしれませんが、使い勝手はいいのかなと思いました。

◆教育委員（奥健一郎）そういう意味から、先生にとって使いやすい教科書と言えると思います。

◆教育委員（西尾剛）先生にとって使いやすいということですが、子どもにとっても、最後にこれだけの文をまとめるんだという意識で授業を受ければ、授業を受ける態度もかなり変わってくるんじゃないかなと思いました。また、書いた文章をもとに先生が評価すれば評価の結果について納得感が子どもにもあるかもしれないし、先生の方としても、文章を読んだ上で評価するんだから、ある程度、客観的な評価になるような気もします。

◆教育長（竹内悟）道徳の評価というのは、基本文章表現なので、他の教科とは少し違う評価なんですよね。授業が 45 分しかない中で、ノートに時間を費やす、それを重要視すると、道徳の授業が薄れてしまうので、どっちかと言うとノートは家に持って帰ってやってきなさいとして、先生は授業の中でのいろんな発言を授業内評価することに力を入れていく方が、道徳を教えるにあたっては生きた道徳かなと。そういう視点で教科書を見ると、ノートがあるからではなくて、日文は使いやすいかなと思いました。

◆教育委員（西尾剛）それは理想ですけれども、実際限られた時間の中で 40 人の児童の態度・発言から評価するというのはなかなか厳しい。教えつつ、評価をその場で書き留めるわけじゃないですから、どうしても印象というか、特に、「わかっていていいな」という数人と「なにもしていないじゃないか」という子たちはわかりやすいですけど、真ん中は評価って難しいですよね。

◆教育長（竹内悟）道徳の評価は、中身を評価するというよりも正解がないので自分の思いを表現している様子を見たりします。ただ、口に出して言える子ばかりではなくて、ノートに書く子もいれば、逆もいて、書くことが極端に苦手な子にたった 10 分間で文章で表現しなさいというのは難しい。道徳の観点は、高学年で 22 項目あって、その中で、できないことを評価するのではなくて、いいところを伝える評価なので、例えば、思いやりという観点の読みもの資料であれば、その授業で該当する子にチェック入れるだけなんです。そのチェックが強いか弱いかの問題。委員が言われたように全員をチェックするなんて不可能ですから。正解とか間違いじゃなくて、自分の思いをしっかり伝えているかという強さを 1 つの評価材料にするというふうに考えていかないといけない。

◆教育委員（奥健一郎）今のご発言、非常に重要だと思います。おそらく理解と気づきの違いだと思うんですね。理解というのは学校の先生が教えてわかって覚えてというのが理解で、気づきというのは「あ、なるほど！」と思わずひざを叩いて、そうだそうだと腑に落ちる、それが気づき。だから理解と気づきは違うわけ

です。我々大人もそうなんですが、シンプルな倫理観、「正直じゃなきゃいけないんだな」とか「思いやりって大事だな」とか、それが各児童なりの卑近の例で、例えば、今日思い切って自分から朝の挨拶をしたら気持ちがよかったとか、そういう経験をしながら気づきに至ったかどうかという、その気づきが非常に重要だと思います。教えてもらって理解するというのも大事なんですけど、シンプルなことでもいいので、いかに気づいたかということはポイントかなと思いました。

◆教育委員（池島明子）今おっしゃったみたいに、気づいた自分を評価してくださる先生がいると、「こういう気づきっていいことだったんだ」と児童は思うと思います。相対評価ではなくて絶対評価だし、道徳は１つの答えはないし、先生方は教科書を使って、プリントをいろいろ作って書かせると思うんですけども、最初の気づきが少なかった児童も、１文字でも２文字でも少しの観点でも徐々に増えていくっていうのが、教員の立場としては、その子の変化を１年を通して見ることができるので、ノートが絶対必要という意味ではないのですが、ノートのようなものがあると授業する側、評価する側はありがたいかなと思いました。

◆教育委員（奥健一郎）まさに相対評価ではなく絶対評価であって、そこのポイントは気づきということです。

◆教育長（竹内悟）それでは、時間もございますので、ここで、道徳の採択をいたします。今の質疑と選定委員会の報告書をふまえて、日本文教出版がいいように思うのですが、いかがでしょうか。

【「異議なし」の声】

◆教育長（竹内悟）では、小学校道徳の教科用図書は日本文教出版の「小学道徳　生きる力」に決定いたします。

※議案第２９号可決

午後１２時４５分終了

議事録署名委員

教　　育　　長

教　育　委　員